

有徳について日本とイギリスを多面的に比較研究した労作

同志社大学名誉教授 庄司俊作（日本経済史／農政史）

本書は、「善や正義にしたがう人格的能力」、つまり人びとの「徳をそなえている」（有徳）状況について日本とイギリスを多面的に比較研究した労作である。

編著者によると本書の主な構成は、①江戸期における「有徳」論、②イギリスにおける「有徳」の歴史、③現代イギリス社会の「有徳」性である。その他補論・特別寄稿・コラムの諸稿が収められ、日本では芦東山を中心に川路聖謨、二宮尊徳、佐藤信淵、石田梅岩、広瀬淡窓、賀川豊彦、福沢諭吉など9名、イギリスではマキアヴェリ、ロック、アダム・スミス、ギデンズなど8名、フランスではデュルケムの合計18人の人物が取り上げられている。

①では「善人を育てること」、「人を褒めること」を目標、基調とした教育を行うとともに「二十二箇条の上言」等を書いた儒者東山、他者への思いやりといわば文化相対主義の立場からプチャーチン（ロシア）と交渉に当たった「士」の川路、荒廃農家と村の復興に尽くした尊徳、寒冷地農業の土壌対策や商品作物の奨励による農業経営の改良と農民の保護を説いた信淵、商いにおける「商人道」を説いた梅岩の有徳性や普遍性が指摘される。②③ではスミスが「同感の原理」の核心である、人間社会の結合をもたらす「適宜点」に関して「人間愛、自然的愛着、友情、尊重」への性向をあげるとともに、高慢もしばしば尊敬すべき徳性、虚栄も愛すべき特性を伴うと指摘していたことに注目する。またギデンズの場合、スミスの有徳性に関して直接論じることはなかったものの、現代イギリス社会において社会主義の刷新を模索し、いかに「善い社会」が形成しうるかを考察した。ギデンズは、デュルケムの「連帯の社会学」を結節点として「分業」に着目したスミスと結びつく（損なわれた連帯性の回復）。かくして、「人間生活に深く関わる『徳』の問題は古今東西を問わず生活の日常的課題であった」。

本書の意図は、通常の「課題と方法」が書かれていないこともあって、特別寄稿論文「福沢諭吉の道德教育反対論」（小室正紀氏）を読むまで正直いって評者にはよく呑み込めなかった。小室論文とそれに対する編著者の応答を読み、十分ではないが本書の全体的な狙いが納得できた。小室論文にあるとおり福沢は儒教教育復活論に対し、儒教が明治の近代社会における道德としては不適合であると批判した。儒教は政治と道德の合一であること、また中国古代周代の社会に適合した思想で、19世紀の社会に向かないこと、そして日本人民は「私徳については平均して身が修まっておき、公德も堅固であり、修身齐家・治國平天下は、現状で少しも問題ない」ことが理由である。道德の「標準」、「支え」はどうするか。道德を支えるものは「各人各種族の人の心事」であり、それは一様でなくてよい。日本の「下流」では「姪祀も仏門も外道も耶穌も」宗教の信心が普及しており、社会の進歩に応じて変化していく。また、「上流士人」の間には「報国尽忠」の資質が乏しくない。「国民道德の標準」は既に備わっており、この徳義で問題はなく、道德教育政策は必要ない——。当時の道德教育不要論としてはしごく真つ当な議論である。その上で言うのであるが、「私徳」も「公德」も、徳が「人間社会の結合への志向」とすれば有徳の具体的内容は歴史的に問われるべき問題ではないか。小室氏の見解に対し、「芦東山など近世の儒者を含めてどの程度のときを超えた「普遍性」を持ち得るかという細やかな疑問である」との編著者コメントの趣旨は必ずしも明快ではないが、当時の道德教育必要論の再評価とは受けとめたくない。

個人の有徳と歴史の変化が日英の比較を通して多面的に明らかにされている点が本書の重要な成果である。有徳は本書で一部の論者が指摘している如く「心性」や「信仰」、「思いやり」の振る舞いであり、それを支えるキリスト教など宗教である。歴史は個人の生き方、近年流行の言葉でいえば地べたからとらえなければ真相に迫り難い。通俗道德論をはじめ、道德が歴史の方法=課題にされた研究は少数ながら存在する。本書で取り上げられた人物は通俗道德論と異なり一般の民衆ではない。しかし、徳を取り上げた点で歴史の真相に迫る重要な1つの方法を示したといつてよく、研究上の意義は大きい。評者にとっても半ば永遠の未解決問題、日本とイギリスの近代市民社会や労働者の世界の異同に関しても解明の糸口になるかも、とさえ思われる。

評者は本書を歴史の方法として読んだ。それにしても、本書における有徳の意味は多様であり、全体を通じた定義が与えられていないことは、それにより多くの問題が取り上げられたメリットを認めた上でやはり残念である。補論やコラムから任意に拾いあげるだけでも以下の通りである。「人々の互助的な心性」（本多利明）・「幕府が今後も政治の中心となってさまざまな決定権を持つ機関となることを前提とする考え方」（上野彰義隊）・「新しい農村づくりの互助友愛の教育と協同等の事業（賀川豊彦）・「精力善用と（人様や社会との融和協調の心である）自他共栄の教え」（嘉納治五郎）・「（外国との交際が非常に制限されていた時代の）、日本文化と異文化は対等であるとする異文化交流の姿勢」（雨森芳洲）・「日本の朝貢使節が法令に違反しても罰することなく、厚遇した明の交流姿勢（勘合貿易）など。これらは歴史的にも同時代的にも人間社会の結合や社会的連帯への志向とまとめられると思うが、如何？

有徳の観念は時代、階級・階層、朱子学やキリスト教、そして経歴や境遇との関わりなどによって異なるだろう。それらを踏まえて人びとの有徳の意味を主体の形成、主体の回復として歴史的に明らかにすれば面白い研究ができると思う。その点で、労働運動や農民運動を指導しながら、日本農業が見習うべきモデルとして内村鑑三が推奨したデンマーク農業を実地に見て帰り、日本農民福音学校を開校、「三愛」・「立体農業」・「協同組合」による農村改造の新しい運動を行った賀川に、「もう少し精神主義的に」「落ち着いた」という気持ちがあったことを明確にした松野尾裕論文は評者には興味深かった。周知の通り当時の農民運動とキリスト者の関わりが深かったが、宮沢賢治との関わりを含め、こうした賀川の思いや行動を通して当時の農民の置かれた状況が手に取るようにわかる。

本書は読みやすい本ではない。しかし、専門が違う評者もいろいろ考えさせられたディープな本である。ひとりでも多くの人に読まれることを期待する。